東大生が教える

「戦争の終わり方」の歴史

東大カルペ・ディエム

監修 西岡壱誠

ウクライナ戦争はどう終わる？

東大生が31の事例研究から考える
「戦争の終わり方」の過去・現在・未来

東大生が教える「戦争の終わり方」の歴史

東大カルペ・ディエム

監修 西岡壱誠

星海社

274

SEIKAISHA SHINSHO

序章

戦争はどうすれば「終わる」のか

本書は「戦争の終わり方」を論じた本です。

これまで、歴史上さまざまな戦争が起こってきましたが、終わらない戦争というものはほとんどありません。戦争には多くの場合、戦う目的があり、一方の目的が達成されればそれ以上戦う理由はないからです。戦争は続ければ続けるほど軍事的にも経済的にも消耗するので、どこかで終わらせる必要があります。

つまり、戦争を考えることはすなわち「戦争の終わり方」を考えることだ、とさえ言えるのです。

さて、読者のみなさんは「戦争の終わり方」にいろいろな形があることをご存じでしょうか。

「相手の国を倒せば、それで戦争は終わるんじゃないの？」

と思う人もいるかもしれませんが、そもそも「倒す」とはどういうことなのか、いろんな考え方があるのです。

カール・フォン・クラウゼヴィッツというプロイセンの軍人がいます。彼の書いた『戦争論』という本は、戦争に対する深い考察から全世界で翻訳され、戦争を考察する上での基本文献となっています。

彼は『戦争論』の中で、「戦争」そして「その終わり方」に対して、「ある考察」をしています。要約すると、「戦争において重要なのは『重心』であり、そ

の戦争の『重心』をなくせば、戦争は終わる」というものです。

重心は、その国の状態や戦争によって変化します。首都である場合もあれば、軍隊である場合もあり、トップの人である場合もあります。

例えばフランスはナポレオンの時代にロシアと戦争をして、その際に首都のモスクワを陥落させています。首都を陥落させたのですから、もうそれだけでフランスの勝ちのように思えるかもしれませんが、実際にはその後の戦いで負けてしまっています。逆にそのロシアは、日露戦争で、ロシア国内にあまり攻め込まれていない状態であるにもかかわらず、日本有利の停戦に調印をしています。これはバルチック艦隊をはじめとする軍隊の敗北がロシアにとっての重心だったのではないか、という見方もできるかもしれません。

また、普仏戦争では、スダンの戦いで皇帝であるナポレオン3世が捕虜(ほりょ)になってしまいました。これがきっかけでフランスは敗北したので、この戦いの重

心は皇帝であったと見ることもできるでしょう。

それ以外の重心には、兵糧というのも考えられます。「もうこれ以上戦えない」という状態になるのは、兵が食べるものがなくなってしまう時です。日本史でもよく「兵糧攻め」という戦略が取られていましたね。

また、三国志で曹操（そうそう）と袁紹（えんしょう）が争った「官渡（かんと）の戦い」というものがありますが、これで曹操の勝利を決定付けたのは「烏巣（うそう）の急襲」です。兵糧が溜められていた烏巣を曹操が攻撃し、袁紹に大打撃を与えたのです。兵糧というのも、重心になりうるわけですね。

要するに、「相手が負けを認めるには相手の重心を倒す必要がある」、そして、「相手の重心が一体どこにあるのかを見極める必要がある」ということです。

相手の重心を見誤ると、首都を陥落させたのに戦争自体に負けてしまったり、予想以上に戦争が長引いてしまったりします。太平洋戦争の時にアメリカが日

本に対して驚いたのは、「こんなに負けが続いているのに、なぜ日本は降伏しないんだ？」ということでした。「さすがに領土を占領すれば戦争は終わるだろう」と考えていたら、沖縄を占領しても一向に日本が降伏する気配がなく、「どうすれば日本は降伏するんだ？」と悩んだと言われています。これも、日本の「重心」は何なのか、アメリカが測れなかったという話として捉えることができます。

この「重心」の考え方を取り入れた「戦争の終わり方」の定義はとても明瞭で、非常に示唆に富んだものだと言えるでしょう。

しかし、現実にはこれ以外にもいくつかパターンがあるのも事実です。というのも、戦争は一対一の戦いではないものも多く、複数の国が絡んでいる場合、一つの国が敗れても戦争が非常に長引いてしまったり、優勢な状態でも第三国の仲介によって戦争が終わる場合もあるからです。

特殊なパターンですが、共通の仮想敵国を設定して、「これ以上両国の間で戦争をするのはやめて、協力して別の国と戦おう」とする場合もあります。

例えば18世紀半ばに、「外交革命」という出来事がありました。これは、オーストリアのハプスブルク家とフランスのブルボン朝が提携する関係になった出来事です。なぜこれが「革命」と呼ばれるかというと、この両者は15世紀末から18世紀の外交革命までの２５０年以上ずっと対立しており、何度も戦争をするほど関係が悪かったからです。

なぜ、この両者が提携することになったのかというと、新しく強敵・プロイセンが登場したからです。強力な敵国の登場で、当時のハプスブルク家のマリア＝テレジアは、「海の向こうのイギリスと協力するのではなく、思い切ってフランスと提携しよう」と考えて、同盟を結んだのです。第三国の脅威が、２５０年以上の対立を緩和させたのです。

また、第二次世界大戦前、ドイツとソ連は対立していながらも「独ソ不可侵

条約」を結んで手を取り合いました。しかし、このときドイツは「ソ連と仲良くしよう」とは思っておらず、「イギリス・フランスなどの国を倒してから、じっくりソ連と戦おう」という思惑があったとされています。他の国と戦うために戦争が防がれることもあるのです。

このように、「戦争の終わり方」はとても多様で、「どうすれば戦争が終わるのか」というのは、当時の人はおろか、戦争している当事者であってもわからない場合があると言えます。

これを踏まえて本書では、「軍隊の勝利・敗北で終わった戦争」「首都・領土の奪還・占領・陥落や、戦力の枯渇で終わった戦争」「宗教問題が関わり、長期化したり特徴的な終わり方になった戦争」「両者の妥協によって終わった戦争」「複数国が関わって複雑化した戦争」の5つのパターンに分けて、古今東西のいろいろな「戦争の終わり方」を解説しました。

案内人は、我々東大生集団「東大カルペ・ディエム」です。
東大で歴史研究をしている我々が、戦争の終わりについて調べ、研究し、その結果をみなさんに共有させていたきます。

日本は太平洋戦争後、長らく平和を享受してきました。これはＧＨＱによる戦後統治がよかった、つまりよい「戦争の終わり方」を享受できたためだと言われています。一方、本書で紹介する戦争の少なくない部分は、前の戦争による禍根が原因となって始まっています。よくない「戦争の終わり方」は、次の時代に新たな戦争の火種を残してしまうのです。
「戦争の終わり方」を考えることは、ただ過ぎ去った過去に思いを馳せるだけでなく、これからのよりよい未来を構想していくことでもあります。
そのためには、今を生きる私たちが、過去の戦争から学ぶべきことを学ぶ必要があると感じます。

歴史は繰り返すと言いますが、過去に起こったことは、これからも起こり得ると考えられますよね。

過去の戦争からこそ、「戦争の終わり方」を学ぶことができるはずなのです。

それでは「戦争の終わり方」を見ていきましょう。

目次

序章　戦争はどうすれば「終わる」のか　3

第1章　軍隊の勝利・敗北で終わった戦争　17

普墺戦争　22
アヘン戦争　26
イギリス・ザンジバル戦争　30
シク戦争　34
ソ連＝フィンランド戦争　37
カタラウヌムの戦い　42

第2章

首都・領土の奪還・占領・陥落や、戦力の枯渇で終わった戦争 47

フレンチ・インディアン戦争 52
イタリア統一戦争 56
南北戦争 61
米西戦争 65
南アフリカ戦争（ブール戦争） 69
コンスタンティノープル包囲戦 73
フォークランド戦争（マルビナス戦争） 78

第3章 宗教問題が関わり、長期化したり特徴的な終わり方になった戦争 83

百年戦争 87
レコンキスタ 92
フス戦争 97
三十年戦争 101
大トルコ戦争 105
チベット動乱 110
三三五年戦争 114

第4章 両者の妥協によって終わった戦争 119

第5章 複数国が関わって複雑化した戦争 145

薩英戦争 123
日露戦争 126
朝鮮戦争 131
ベトナム戦争 135
中ソ国境紛争 140
スペイン継承戦争 150
クリミア戦争 155
スペイン内戦 161
グアテマラ内戦 166
日中戦争 170
太平洋戦争 174

おわりに　ウクライナ戦争の終わり方を考える

軍隊の勝利・敗北で終わった戦争

第1章

この章では、軍隊の勝利・敗北が戦争を終わらせたケースについてお話ししようと思います。

当たり前の話ですが、戦争は軍隊同士のぶつかり合いが基本です。A国とB国が戦争をするとき、普通はA国とB国のそれぞれの軍隊が戦うことになります。では、それぞれの軍隊の「強さ」とは、どのようにして決まるのでしょうか？

まず一つ、軍隊の強さを測る指標には「軍人の数・量」が挙げられますね。その軍にどれくらいの人数がいるのか、ということですが、基本的には当然多い方が有利です。

ただ、この「軍隊の数・量」は、時と場合によっては意味をなさなくなる場合があります。「軍隊の質」に大きな乖離がある場合には、何人束になっても敵わないということがあるのです。

例えば、寄せ集めの軍隊と、百戦錬磨の軍隊では、その戦力に大きな差がある場合がありますね。「一騎当千」という、「一人の騎兵が、千人にも勝るくらい強い」ことを指す言葉もあるほどですが、実際にソ連＝フィンランド戦争で活躍したシモ・ヘイヘは一人で敵兵を５４２名射殺したという記録があります。「一人が５００人以上にも勝るくらい強い」こともあるのです。

では、「軍隊の質」を示す指標にはどんなものがあるのでしょうか。

まずは練度です。訓練をどれくらい積んでいるのか、実戦経験がどれくらいなのかは大きな要素ですね。特に戦争というのは非日常な世界ですから、実際に戦場に行って戦った軍と訓練しかしたことのない軍には大きな差があるといえるでしょう。

他の大きな指標が「軍の兵器の質」です。兵器の質というのは、時として残酷なほどの差を生みます。単純に、空から爆撃をしてくる相手に対して竹槍で勝負できませんよね。100人の竹槍部隊がいても、航空部隊の1人に負けてしまうわけです。

昔の話で言えば、戦国時代の武将・織田信長が強かったのは、鉄砲をいち早く大量配備したからです。鉄砲というのは、弓よりも特別な訓練が必要なく、昨日まで農民だった人でも次の日から立派な兵力になることができます。長篠の戦いで、当時最強と言われていた武田の騎馬隊を、鉄砲という新技術で倒したのは有名な話ですよね。新しい技術を持った軍隊が、その兵力差を覆す例は少なくありません（なお最新の研究では、有名な「三段撃ち」は後の時代の創作ではないかとも言われていますが、信長が鉄砲を活用して武田軍を倒したのは間違いない事実でしょう）。

最近の話で言えば、湾岸戦争ではついにコンピューターが兵器に組み込まれることにな

りました。イラク軍も軍事力は強かったのですが、アメリカ軍はコンピューターを使ってピンポイントで標的を倒していき、「まるでテレビゲームのようだ」と言われました。「ニンテンドーウォー」なんて言葉もあるくらいです。任天堂からしたらたまったものではない造語ですが、しかし戦争の勝敗が科学技術によって決着することがある、というのも重要です。

ちなみに、直接武器の質には影響しない科学技術によって軍隊が強くなることはままあります。例えば戦争が起こるとプロイセンはたびたび鉄道を敷いて、鉄道で戦場まで人員や物資を送っていました。鉄道によって戦場までの移動が楽になり、また食べ物や武器などの資源も移動させやすくなります。こういった、「自国の軍隊の戦闘力を維持するため、そして戦争の作戦を支援するための、人員・兵器・食糧などの整備・補給・修理などを行う機能」のことを「兵站（ロジスティクス）」と呼びますが、このロジスティクスこそが第二次世界大戦以降の戦争で重要な要素になっていると言われています。軍隊の質は、戦場で戦う人だけの問題ではなく、その現地にいかに物資を運ぶのかという問題にもなっています。

さて、軍隊の強さはどのように戦争に影響し、戦争を終結に導いていったのか、さっそ

く見ていきましょう。

普墺戦争

事前に戦争に備えていたプロイセンの電撃的勝利

時期：1866年
対立：プロイセンVSオーストリア

どんな戦争か？

普墺戦争は、その名前の通りプロイセンとオーストリアの両者が対立して起こった戦争

です。

プロイセンとオーストリアは、同じドイツ人の国家です。そしてこの時期、「同じドイツ人国家同士で統一しよう」という機運が生まれ、ドイツ連邦と呼ばれる集合体が作られていました。

これは、35の連邦と4つの自由都市で構成された国家集合体でしたが、このドイツ連邦の運営で、プロイセンとオーストリアはたびたび揉めるようになります。どちらも大国であり、この両国の発言力が強かったのですが、だからこそ対立することが多かったともいえます。

このときプロイセンの首相だったのが、かの有名なビスマルクでした。彼は、このドイツを統一する野望を持っており、オーストリアに戦争で勝つことを考えて軍国主義化を進めていました。

このビスマルクが、巧みな話術でオーストリアの王・ヨーゼフ1世を挑発します。「そっちがその気ならやってやるよ」とオーストリアはプロイセンに対して戦争を吹っ掛けたのでした。

戦争終結の流れ

この戦争では、開戦後のプロイセンの動きは本当に速かったと言われています。鉄道を使って軍隊を動員し、銃も性能のいいものを用意するなど、圧倒的なスピードで戦争準備を進めました。もともとビスマルクにとって、この戦争はずっと想定していたものだったので、当然といえば当然です。

結局、プロイセンはケーニッヒグレーツの戦いで圧勝し、戦力差を誇示することになりました。その後、オーストリアは「この戦力差ではなすすべがない」と降伏し、約7週間で勝敗がつきました。

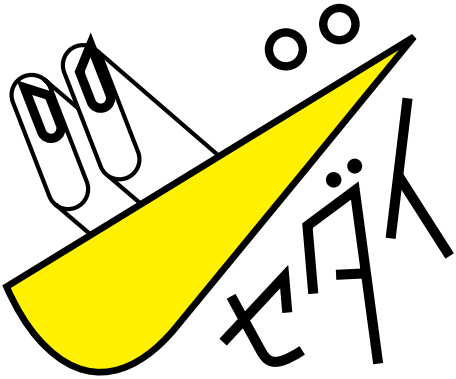
戦争は1年以上続いても何もおかしくないのですが、普墺戦争はわずか50日程度で決着がつきました。この短期決戦ぶりは、ビスマルクの才覚を証明していると言えるでしょう。

終戦とその後

この戦争の結果、プロイセンの主導によるドイツ統一が進められることになりました。逆に大敗したオーストリアはドイツ統一の主導権を失ってしまいます。今でも「ドイツ」と「オーストリア」が別々の国として存在しているのは、この時の流れを汲んでいるのです。

また、オーストリアは敗戦後、「オーストリア＝ハンガリー二重帝国」となります。

二重帝国という言葉は聞きなれない言葉ですが、これは、オーストリアが弱体化し、帝国内の一大勢力であったハンガリーの独立を阻止できないと判断した結果、形式的な独立を認めたものでした。ハンガリー王国の王位をオーストリア皇帝が兼ねて、その下で二つの国がそれぞれ別の政府・別の国会を運営するという体制です。



何と闘うか？

https://ji-sedai.jp

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント　著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！　行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研　若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み　既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!